

「亡命のトロツキー」と信条告白

古 賀 保 夫

I

P. Weiss の「亡命のトロツキー」*Trotsky im Exil* (1969) は2幕15場のドラマである。この中で Weiss は革命、政治、歴史の生成と人間との関連、革命家トロツキー (Lev Davydovich Bronstein—1877~1940) の意識の問題をとりあげている。各場面でトロツキーの革命意識実践態度・亡命生活が活写されている。その手法はトロツキーが過去の自己の活動期を回想するという筆致となっているが、幕はトロツキーが机に向って原稿を読んでいる姿で始まる。この舞台設定が終幕でのトロツキー暗殺状況と同場面となっているのは、トロツキーの生涯が孤独であり「裏切られた革命」を象徴した人の姿を巧みに映している。つまり「亡命に生きた」トロツキーの生涯を暗示している。というのは10月革命後のトロツキーは権力の中核に座した時期は短かく、主流から転じて反動派の首領を目され、政治の実権からは孤立していた。しかもメキシコで暗殺された (1940.8.20) あとも彼の唱導した永久革命論さえも、いわば追放されているからである。おそらく Weiss は題名の *Trotsky im Exil* の *Exil* に「追放・亡命・流刑」の意味全部を *Trotsky* の思想自体にまで適用させているのではないだろうか。それに Weiss はトロツキーへの共感をこのドラマに托しているとさえ感じられるのである。

(注) 例えば第6場 (第2次追放) でトロツキーに『ダンテの神曲は特定の階級の関心から書かれているそれは単に13世紀のフィレンツェの支配階級の引き写しではなく、生きた時代を論じている。時代の制約を破っているし、亡命地で執筆して二度と帰国していないと』言わしめている。このダンテの姿はトロツ

キーのそれと類似している。もともと Weiss はダンテの神曲を現世的なものとして受けとめ、神曲を現代悪と人間実践の問題として扱っている。それにトロツキーのインターナショナル思想をいわゆる Weiss のいう「第三世界」に応用すれば、トロツキーの神曲観が実は Weiss の神曲観、従って彼の世界・社会観につながる。だから神曲を通して Weiss のトロツキーへの共同感情が見出せる。そこには迫害されたものへの連帯が流れているし、また第三世界にトロツキーの影響を照射したものといえよう。

トロツキーは個人も、また思想も亡命[・][・]していたし、また現に亡命の状態にあるといえる。だが時の権力者スターリンに恐怖を与え、一貫してスターリン政権と戦ったのはトロツキーだけである。彼の影響の甚大さはいまのところ他に見当たらない。まことにトロツキーは妖怪 Popanz であったのだ。I. ドイツチャーは「単に歴史の問題、ないしは一人の偉大な革命的指導者の名声を死後に正当に評価するといった問題ではない。……トロツキーにはなにか学ぶべきものがあるのではないか、と考えている」（革命は裏切られたか。New Statesman 1957. 8月号）と書いている。

Weiss も同様な観点から予言者トロツキーが不当な評価を受けているとし、そこから再び革命の過程と未来への展望を表示したかったのではないだろうか。少なくともトロツキーは死の瞬間まで自己の理論の妥当性を信じていたし、それに則して行動して一生を終えた。迫害する者に対しては自己の信条の優位性を信じて真一文字につき当った。情勢が自己に不利だと分っていても、いささかも劣等感を持たなかったのだろう。このような情勢下のトロツキーは破滅型ともいえよう。こうした心情の持主を主人公としたためだろうか、この劇は終幕が暗殺という「暗転」を伴いながらも悲観的なドラマとは感じられない。偶然という人知の手の届かぬものに操られる人間を舞台に乗せているというよりも、現代の中心的課題へ投げかけた矢とも考え得るし、また人間的、社会的なもの、階級なき社会建設への限らない継続的な歩み、社会主義の勝利を確信する Weiss 自身を現わしているとも見られる。

第14場（遺言）ではトロツキーは楽観主義者として取り扱われている。

もとよりその根底には自由主義的信仰を乗り越えたヒューマニズムが横たわっておればこそだろうが、同場面でトロツキーの表白は力強く響いてくる。

DIEGO RIVERA………… Trotzdem bist du Optimist geblieben?
TROTZKI Ich kann den Glauben an die Vernunft, an die menschliche Solidarität nicht aufgeben. Seit meiner Jugend ist dieser Glaube nur noch stärker geworden. Ich habe nie eine persöhnliche Tragik gekannt. Mein Leben gehörte unlöslich zusammen mit den Phasen der Revolution.

この台詞の中には革命と人間というテーマも含まれている。

Ⅱ

Trotsky im Exil では登場人物は多彩、かつそれぞれが複雑な性格の所有者である。トロツキーの一味として反スターリン運動の加担者となり、粛清されたカーメネフ Lev Borisovich Kamenev (1883～1936), ルイコフ Aleksei Ivarovich Rykov (1880～1938), ジノヴィエフ Grigorii Eusevich Zinoviev (1883～1936), ピャタコフ Georgi Leonidovich Pyatakov (1890～1937), ブハーリン Nikolai Ivanovich Bukharin (1883～1938) も登場する。それぞれキーロフ暗殺事件の中心人物とか、合同本部事件の関連者、ソヴィエト国家顛覆陰謀事件の人物などである。これら人物はいわゆる粛清裁判において検事の読み上げる起訴状を易々諾々と全面肯定する。殆んどが自己の誤まりを進んで批判し処刑されているのだが、この歴史上の事実、被告の証言をドラマでは適時に織り込んでいる。この記録性は Weiss 文学の特色であるが、これはいわば証言の文学と呼称され得よう。

(注) 証言の文学という点では作家エリ・ヴィーゼルの「夜」「昼」、日本では大岡昇平の「俘虜記」、吉田満の「戦艦大和」、広津和郎の「松川裁判」、「耳鳴り」の正田篠枝、「屍の街」の太田洋子、「苦海浄土」の西牟田礼子などの作品もそうであろう。とくにヴィーゼルの作品がアウシュヴィツのナチ・ドイツ

の残虐記録から出発したことは現在と未来に問題を投げかけて読者に迫る。

Weiss の作品も同じ記録性を有している。言葉の限界性ということを考慮すれば、記録だけがもち得る迫真力が有無をいわず人心をとらえるので、その意義は少なしとしない。とくにドラマの場合は、心理主義的手法だけでは独りよがりの自己満足の抽象論に終ることがあり得ると思うからである。

反スターリン主義者の登場のほか、ドラマでは国際情勢の一つとして中共、日本、ヴェトナム、さらにヒトラー、Mikado、ホーチャーミン、毛沢東に言及する場がある。（第12場「世界革命」）

（注） P. Weiss はベトナムについては「ベトナム討論」「ベトナム」を書いているが、ベトナム和平をまっけて「ベトナム解放」を書く予定であったという。

ここではフランス、ドイツ、インドシナ、アフリカ、ラテンアメリカなどの学生が登場してそれぞれの見解を発言するのだが、この人物の設定は永久革命論を固執したトロツキーの劇であればこそ生きてくる。

フランスの学生は「ベトナムや中国で起っている現象は永久革命理論に対応している」といい、ラテンアメリカの学生は「ぼくらは実践の中で戦略を見出す」と叫んで、トロツキーに同調しているのもあれば、インドシナの学生は「ホーチャーミンはバリの亡命地でわが同胞殉難者よと叫んだ」と伝え、ラテンアメリカの学生は「人里離れた地域の方が活動は容易だ」と主張するなど若干の食い違いを言うのもいる。

だがこの学生の発言内容は第三世界で起っている革命の予見とも受け止められる。とすればこのドラマの主要人物は歴史的な存在としてのトロツキーのみではない、早くから第三世界の革命を唱えていた Weiss その人が投影した人であるとも看取される。劇の中の巨人であるトロツキーと対話する学生とが、ともに相乗されて Weiss 自身の投影となり、Weiss の信条を告白している姿なのである。

いわゆる「分割された世界」に身を置く P. Weiss の対社会の自己表白ではないか、ということである。各登場人物の台詞をパズルを解くようにして当って行けば、その解答は作家 Weiss の投げる言葉と読まれてくる。疎外された人間が、いかに人生の根源を求め行動すべきかを追求する

真剣な姿とも解釈されてくる。記録性としてのこのドラマの意義はここに存するだろうが、さらに当然のことながら Weiss は革命と反革命、スターリンの一国社会主義とトロツキーの永久革命論との論点にも筆を運ばせている。またレーニンが短言の中にトロツキーの性格を鋭く見破っている個所もある。

ところでドイツチャーは「1920年の中ごろ……スターリンとブハーリンは進んで一国社会主義を説いた。……これに対してはトロツキーもジノヴィエフも、カメネフも少しも争いはしなかった」（ロシア革命五十年―「階級闘争の行き詰り」）と書いている。

（なおトロツキーがスターリンの5カ年計画を経済的無謀であり危険である、と批判しはじめたのは1930年のことであった。）

これが権力争奪にまで発展してくるのである。

（注） トロツキーは党内デモクラシーを主張して一国社会主義建設可能論に反対して永久革命論を唱え、スターリン反対派の指導者となり分派闘争を展開して中央委員会から除外され、党から除名された。彼の思想は極左主義の思想的源泉となった。それは冒険主義的な世界革命論であり、国外で第四インターを結成し反ソ、反革命陰謀に活動した。彼の国際社会主義運動に対する影響は極めて大きい。（岩波「人名辞典」、青木書店「哲学辞典」から）

Ⅲ

第10場（クロンシュタット）でトロツキーは彼の永久革命論を鮮明に打ち出している。

TROTZKI…… Doch die Revolution läßt sich nicht konservieren in einem Land. Sie ist Teil eines einzigen zusammenhängenden Prozesses. Ein nationaler Sozialismus kann Rußland nur wieder in die alte Rückständigkeit werfen. Hat Lenin nicht bis ins letzte unsere Abhängigkeit von der internationalen Revolution betont?

これはトロツキスト・ブルームキンの「作家も映画人も画家も、¹彼²Er（スターリンを指す）を讃えている」というのに答えた一言であり、ロシアが資本主義に包囲されているからこそ、その一環を突破することが重要だと説いているのである。これに応じてブルームキンはつぎのように対応する。

BLUMKIN Der Name Trotzki wird ausgekratzt aus den Annalen der Revolution. In Eisensteins Film über den Oktober kommen Sie nichts vor. Die Hearanwachsenden werden von Ihnen nichts mehr wissen. Die Geschichte wird neu geschrieben. Übrig bleibt nur Er. Er, als einziger, stand von Anfang an neben Lenin.

ここに至ってトロツキーは革命の記録から抹殺される こと になってくる。かつて赤軍の創設者として輝かしい姿を大衆の面前に現わした人物は歴史の中に埋没している。その役割りを終えたばかりでなく、生きながら存在価値のない人間となってくる。歴史の非情性が前面に打ち出される。

「歴史は幸福の王国ではない」という有名な言葉があるが、一つの社会の存亡興廢、個人の存在と失墜、そしてなお存する相互の関わり合いは、個人的な幸福、悲劇などは歴史の進行からみた場合、些細なことであることを痛感せずにはおれない。第2場（流刑地ヴェルホーレンスク）で「歴史、この怖ろしいメカニズムは這って進む。……歴史を前進させようと」実践主体の役割りを強く押し出し、「時を待つ」という一見眞重ながらも実は手を拱くといった態度でなく、「活動」へと立ち上がる当の本人が、逆にその歴史の流れに押し出されてしまうのだ。

Weiss はここでは権力のドラマを画くのでなく、むしろ冷酷な歴史の歩みを、そして世界の行手を変える革命の潮流を、それが人間の運命を一個の孤独な人間に変えてしまう冷厳さを提示している。

（注） 歴史の上で生起する現象の背後に合理主義を認識し、人間関係を市民関係で捉えたのはヘーゲルである。ヘーゲルの観点に立てば、真理はその要関を通

して自己を完成するが、この場合、過去は単に解消されるのではなく保存されて、より高い段階に高められる。「ドイツはもはや国家ではない」（ヘーゲル政治・法哲学著作集「ドイツ憲法論序説」）といているのは、単なる事実というより、この事実を生んだ人間の理性、それを变化させる理性からみた現実を指している。つまり真なるものが現実的となるのは、主体となることによって可能となる。そしてその理性が現実と統一される為には主観主義経験主義は排せられ、歴史は冷酷となろう。

まことに歴史のサイクルは個人の命運を左右する。しかも歴史は案外に明確づけられていないとも言える。（1930年代のスターリンの粛清時期、殺人権限の拡大、1956年のフルシチョフのスターリンに関する暴露、さらには一般的国際間の外交関係などを取り上げてみても、現象の背後、事件の背後に何か不可解なものが残っているという感がある。権力者の御都合主義という一点からもそれがうかがえる）

IV

フィクションだろうが、このドラマではダダイストも登場してくる（第7場、チューリヒ）。その人物はバル Hugo Ball, ツェラ Tristan Tzara ヒュルゼンベルグ Richard Hülsenberg などである。これらダダイズムの創始者、精神分析学者の登場はダダイズムと史的唯物論の対決といった面から書かれたと思われる。というのはダダイズ、ムニヒリズムが大衆的な民族芸術に止揚された新芸術を第三の見解として解釈しようとの意図を持っていたとも察せれるからである。また同場が芸術論争の場となっているからである。

（注）「チューリッヒに起ったダダイズム運動は、因果の関係、逆転不能な時間、功利的な過程などという残酷な事実を攻撃していたのだが実際のところ、それは日毎に何万という人間の死を計画し、公認し、正当づけていた不毛な合理主義の構造に攻撃をかけていたことになる」（ジョージ・スタイナー「青熊の域にて」in bluebear's castle）

ダダイストたちが「人生とは飛翔だ」とか「われらは一切を破壊する」「図書館も博物館も劇場も破壊されたら革命は何もならない」「規則の束縛から解放された理性」などと舌論したあとでトロツキーは「社会秩序の

変革に伴って芸術的観念も古典的な基準から解放されると」切り返す。これは独立した文化としての存在否定である。文化を古代中世の文化，ブルジョア文化と並列していない。このあとレーニンは「芸術の絶対的自由はない。芸術は党派的であるべきだ」「プロレタリア芸術はリアリスティックで科学的なものになる」としめくくっている。

かつてトロツキーはプラウダ紙上で「人は政治のみによって生きるに非ず」（1923年）と言っている。これは政治からの逃避でなく，権力のための闘争を革命への「魂」のための闘争に転化したことを内包した言葉である。社会，政治の革命は意識の変革でもなければならなかった。政治上で敗北しても，意識の上では勝利を得られるということである。この時点で彼の頭には芸術的前衛と政治的前衛の乖離の問題が潜んでいたのかも知れない。このドラマでは「無階級の文化の到来」と言っている。が，これはプロレタリア文化の独自性の否定にもつながる考えである。こうした考えは，案外トロツキーの人間的弱さに通じているのではないだろうか。例えば第14場（遺言）で「われわれは人間的弱点，臆病さ，野卑さを絶滅できなかった」というトロツキーの台詞がある。この生の声を絞り出すトロツキーに，レーニンはトロツキーの実践主体としての弱点を看破していたのではないか。というのは第9場（10月26日）における二人の対話にそれを見出せるからである。

LENIN …… Weil du dich an diese falschen Humanisten hieltest. Wolltest du mich eigentlich überspielen? Die Führung an dich reißen?

TROTZKI Ehrgeiz. Drang, sich zu beweisen. Das alles gibts nicht für dich.

LENIN …… Deine Selbstsicherheit, deine Weltsicht, sie werden nur Hochmut, Eitelkeit drin sehen……

ここには，ただ権力への道に向うトロツキーと，同じ権力を目指しながらも「革命」と「人間」との結合を忘れぬレーニンの人間像との差を見るからである。レーニンの指導した十月革命は単なるボルシェヴィキの蜂起

ではなく、まさに革命であった。それ故に小数革命家集団の独裁的人間像をレーニンは認めなかったのであろう。両者の人間の差がこうした会話の中にも見出される。

また第11場（レーニンの死）でレーニンは「スターリンを官職から遠ざけねばならぬ……しかしお前（トロツキー）は極端に傾き易い。目標より先を目指している。それで誤まり易い。お前は自分の誤まりに気がつくのが遅かったのだ」とトロツキーに直言している。トロツキーを左翼小児病患者と診断しているのだ。このトロツキー像は13場（民衆の敵）でも画かれている。風の如く登場する医師がイプセンの「民衆の敵」を援用しながらトロツキーを評価する個所がそれである。「彼——民衆の敵——は一匹狼で大勢に順応しない。彼は精神的貴族主義者であった……世界で強いのは独りで立つ男だと告白した」と、トロツキーの身体を診察しているような態度で、実は彼の性格を診断し本人に直言しているのは、さり気ない言であるだけに一層相手の胸を貫く刃のような鋭さをもっている。才幹ありと認めながらも、その人物の自信過剰を性格的な欠陥としているのである。

このようにトロツキーの人間輪廓を批判していることは「トロツキーはロシア革命には不適當な人間である」という烙印が押されたのも妥当であったろうという判断が生まれる。そしてトロツキーは衆知の如くユダヤ人であった。ではこのドラマでユダヤ人問題はどう取り扱われているだろうか。

V

ロート Joseph Roth（1894～1939）の作品にトロツキーを主人公とした短編「沈黙の予言者」Der stumme Prophet がある。その中で主人公は Ich bin Zuniker と自己省察している。反革命家と断定され、社会的地位、財産、名誉はもとより感覚的快樂を度外視しきって生き、同時に既成道徳を否定した生活者が自からを省みて、自からを規定した言葉である。この言葉は自己の存在が亡命といういわば影のうすい生活のための皮肉か、または権力闘争に明け暮れて疲れ果てた自己嫌悪の感情から来た感情かも

知れない。それよりもユダヤ人という抜き難い生得の運命に対する本能的な感懐であったとさえ思える。

ユダヤ人一般をトロツキーはどう解釈していたか。この劇では第8場（10月25日）、第12場（世界革命）にユダヤ人観が展開する。レーニンとともに革命への道を真一文字に進んでいたトロツキーについて、レーニンは「素晴らしいボルシェヴィスト」とほめ上げ「自分の後に生まれた者は、トロツキーについて不十分な記録しか伝えられぬだろう……歴史を偽造するかも知れぬのだ」（第8場）という。この一言は「歴史の偽造者」としての人物スターリンを言外に含めているとも解される。さらに同場面でレーニンが「君（トロツキー）には内務委員会の人民委員になってもらいたい」と言えば、ここでトロツキーはユダヤ人という身分を持ち出して「敵の手にユダヤ人であるという武器を渡すのか」と詰めるように問う。レーニンは「偉大なインターナショナルな革命にはそれはとるに足らぬことだ」と答える。このユダヤ人の自己意識が第12場（世界革命）でつぎのように発展する。まずドイツ人学生との問答がある。

DEUTSCHER STUDENT Wir haben viele Fragen. ……Sie haben sich einmal gegen den jüdischen Separatismus gewandt. ……Und jetzt nehmen sie teil an der Verfolgung der jüdischen Familien. Es hat uns nichts genutzt, daß wir uns nicht als Juden betrachten. Wir wurden zu einer Rasse erklärt. Auch in der Sowjetunion werden jüdische Bürger diskriminiert, ……

TROTZKI Die Assimilation der Juden mißglückte. Weniger weil die Juden es nicht wollten, sondern weil sie weiterhin gebraucht wurden, zur Entlastung, zur Ablenkung vom Klassenkampf. ……In der Sowjetunion ist Antisemitismus schwieriger festzustellen. ……

「永遠のユダヤ人」「ビザなき旅行者」のユダヤ人それは地上に自からの国土を持たず世界に拡がった人間である。世界の各処に散在しながらも

一つの精神的な共同体を失なわない人間である。それがドイツ人学生の肺腑を揺る問いとなっている。これに応ずるトロツキーの口からは他民族への同化失敗を挙げている。しかも、それはただ利用されているだけだ——というのだ。さらにフランス人学生との間にユダヤ人間答が交わされる。

FRANZÖSISCHER STUDENT Wenn die Dialektik verdrängt wird von Emotionen, kriecht auch Hetze, Pogromstimmung wieder hoch. Als Gegenzug, verstärkter Zionismus.

TROTZKI ……Ich sehe auch Gefahr in der jüdischen Einwanderung nach Palästina. Kann nur zu wachsendem arabischen Widerstand führen. Einzige Möglichkeit, erweiterter Kampf zur Wiederherstellung der Internationale.

反ユダヤ主義をフランスの学生が危惧するが、対するトロツキーの考えの中には、パレスチナ移住に危険を予感している人間的動揺がうかがえる。現代のアラブ対イスラエルの戦いを先見しているとも考え得るのだ。トロツキーの言葉が現在なお生きている予言者の声となって現在世界の人間に迫ってくる。これは Weiss が心底から世の人に告げたい一言ではなかったろうか——とさえ思われてくる。ただトロツキーは「インターナショナルの復興のため戦うこと」の中に問題の解決点を見出している。この問答はさらに続く舞台の進行に従ってはっきりしてくるのだ。

DEUTSCHER STUDENT ……die Nazis planen ihre systematische Ausrottung.

TROTZKI Für mich sind sie Juden nur Teil der Weltbevölkerung, die jetzt vor einer Auseinandersetzung auf Leben und Tod steht. ……Der Kampf der Juden um ihr Überleben ist in der großen Konfrontation von geringer Bedeutung. Sie sind nur Opfer eines Widerstreites innerhalb des Kapitalismus.

ユダヤ人問題は、それだけが切り離された事象でなく、歴史的な社会機

構から派生したものとして認識されている。

（注） ユダヤ人問題の本質がユダヤ教にあるのではなくて、ユダヤ人の社会的経済的政治的あり方にあることを指摘したのはマルクスである。

つまりユダヤ人は、ただ資本主義内部の矛盾の犠牲者である、という解釈が生まれる。

この論拠に立てば問題の解決は明確化してくる。資本主義の矛盾を解決する社会主義革命によって問題は問題となくなくなるわけである。そうしてユダヤ人迫害、反ユダヤ主義問題を歴史社会から切り離された別個の、独立した問題として取り上げることは、基本的な解決策に程遠いことになってくる。かくてこの問題の解明も包含したインターナショナルな革命運動に重点を指向するトロツキーの戦略戦術となる。

この基本線に Weiss は反対ではないと考えられる。なぜならユダヤ人というただそれだけの理由で、迫害される側に立たせられるという苦しみは本人のみが痛々しく感じ得る体験であろうし、傍観者流には感得されぬ一つの世界苦であろうからである。被害者の側に立つ場合は、この被迫害感情は人種問題以外の被搾取者への共同連帯感情が抵抗なく拡大され得るだろう。それは心理的な必然性であろう。これはただ簡単に人間の心に生ずる心象というよりも、その生きている環境の本質追求により、それがインターナショナルな見解となって理解されるのだろう。既成の国境という概念は喪失することになる。

（注） 国連は1947年パレスチナをユダヤ人とアラブ人の居住地に分割する案を出しイスラエルが独立した。その建国が果して理性的であったかどうかについては、これをアラブ人の立場からすれば非理性的であったろうし、イスラエル建国はその結果においてアラブ人をユダヤ人が追放することになり、これまでの追放の身は逆転する。ユダヤ人問題は一地区だけの問題に限定しては十分に見通せぬと思われる。サルトルが「ユダヤ人の運命は自分たちの運命だ」（ユダヤ人）というとき、ユダヤ人の生命も他のどの人間の生命も同じ価値をもつ、という認識から生まれているのではないか。この観点に立脚すれば現代の反ユダヤ主義の問題は差別と偏見の生んだものと解され得る。

戦後西ドイツでは「官庁的性格を帯びた」『親ユダヤ主義』に対して直接間接に巧妙な承判が加えられている。」（高田光雄著「西ドイツの精神構造—ネオ・

ナチズムの政治意識)。一方ソ連では——フルシチョフの過渡政権は…スターリン時代の末期数年間の反セミ運動は姿を消した。ユダヤ人の平等権は保証されている。だが…かなり強い反ユダヤ的な底流がひそんでいる。ユダヤ人問題の真に公正な扱い方はまだ見出されていない。(1964.10.26. ロンドン商科大学における I. ドイツチャーの講演)。

「革命はユダヤ人を、完全に無条件に解放した。…この体制の中にぬきんできた人物のうちの一人がレオン・トロツキーであった。…ユダヤ自治共和国が遂につくられる、という望みが出てきた。しかし実際にはソヴィエトの制度はツァーリ時代のもの以上にユダヤ人の生活にとっていっそう不幸なものであった。…シオニズムはブルジョア運動として非難され、その同調者は容赦ない迫害を受け、シベリアへ送られた。」(シーセル・ロス「ユダヤ人の歴史」—新たな世界)

またこのドラマの13場(国民の敵)で裁かれるジノヴィエフが *Höre Israel, Höre Israel, Unser Gott ist der einzige Gott.* と叫ぶ声はトロツキーが「社会主義社会で人種問題は解決する」としたのに比べてユダヤ自体の意識、非ユダヤ人の中に潜在する既成観念の根強さを知らされる。これはまた今日の問題であろう。われわれがいかなる文化・社会を持ち、どんな民族に属しようとも人種問題についてはなお既成概念の中にはまり込んで行く危険性がある。またその既往の観念の中に住んでいる限り対異民族の問題だけでなく、同一社会内においても差別偏見が消失しない。そして自他ともに疎外されたままの姿を続けることになるだろう。

ともあれ現実問題としてのユダヤ人の未来は、580万人のユダヤ人が居住するアメリカ(世界のユダヤ人の3分の1以上がそこに住み、ユダヤ人組織は50に上るという)とパレスチナのユダヤ人をもって始まるといえるだろう。

VI

トロツキーは最後の亡命地メキシコからもソ連労働者農民にメッセージを送り「革命の成果を敵階級に引渡すな、そのためにスターリニズムを打倒せよ!」と訴えた。1940年8月20日、ジャクソンと自称するスペイン人にピッケルで頭を強打され翌21日午後7時25分絶命した。この事件より前の5月 G. P. U の襲撃隊に襲われているが、ドラマでは第14場(遺書)の場がそれであり、画家シケイロス David Alfaro Siqueiros (1896~) がその指導者となっている。このときトロツキーは「シケイロスも……ぼくを最大の敵と見ている。自分が生きているというだけでも、現在の党本

部を不安にさせている」と昂然といい放つ。その後3カ月、トロツキーに止めを刺したのは彼の身邊にいた人間ジャクソンである。

この加害者については、かねて側近の一人がトロツキーに「ジャクソンは信用できない」と警戒をすすめる。トロツキーは「われわれは人間が変革できうらということから出発すべきである」 Wir müssen immer davon ausgehn, daß Leute verändert werden Können. と答え過剰警戒心を訓しているほどだ。これはあるいは Weiss の人間観と受けとれる。

Weiss は「サド侯爵の演出のもとにシャラントン保護施設の演劇グループによって上演されたジャン・ポール・マラーの迫害と暗殺」 Die Verfolgung und Ermordung Jean Pau Marats dargestellt durch die Schauspielgruppe des Hospizes zu Charenton unter Anleitung des Herrn de Sado. において急進社会的立場に立つマラーと徹底的個人主義者サドを対立させ、Weiss は第三の立場をとったが、このあと傍観者の第三の立場を捨てて世界変革の側に立つに至っている。そして現実的な国際的政治的問題解決への道を探究する。ここで Weiss は内向的な立場から外向的な人間に変身している。これは社会的な闘争は、結局は現実の場においてれの帰趨が決まる、という冷徹な事実を、身をさいなむようにして経験したことから結論づけられた解答ではなかったろうか。この転化された姿勢とトロツキーのさきほどの言葉の間に切り離せない関係を見るからである。つまりところ実践主体としての条件を身につけた人間の存在ということである。

（注）現代メキシコの画家シケイロスは1972年10月9日付けのドミニカ週刊紙「オアラ」でトロツキー襲撃事件を語り、それを認めたような言を發している。1940年5月24日トロツキー暗殺未遂事件はシケイロス指揮によるものと認めざるを得ない。それはまたスターリニストによるラテン・アメリカ諸国の警察買収も可能だったことを示している。それがこの第14場である。

また Weiss は革命に付随する多くの矛盾をトロツキーという個人の中に投影し、それが克服され得るもの、克服すべきものとし、また人間はそ

の世界観なり社会観を確立させ、それに応じ変身し得ることを主張しているかのようである。そこにこそ人間存在のあり方を、そしてまた人間観を見定めたとも解されるのである。

このドラマが Weiss の信仰告白劇と見なされるのは正にこの点からである。もともと「Weiss は自己告白が過剰だ」（エンツェンスベルガー）と皮肉られている作家でもあるが、それは徹底して告白し続ける材料に囲まれているという現実性の問題に帰着してもよからう。そのためには芸術至上主義、唯美主義とは無縁なのだ。高踏的な言動は無用であり、難渋なひとりよがりの論も不用である。それよりも記録証言という事実の重さを歴史の重さとして提示せねばならぬということではなかったろうか。

その「現世」「事実」はダンテが神曲を作った時代と同じ地獄の様相を呈している。ダンテ自身はこの深遠な作品を喜劇と名づけた。これは神曲がその叙事性から見て庶民性と無関係ではないことを知悉していたからに他なるまい。この点においてはトロツキー劇も神曲になぞえられ得る。Otto F. Best は P. Ws' Trotzki ist ein «theologisierter» Trotzki, eine Legendenfigur—(P. Weiss, 185頁) と書いているが、Weiss はいわば犠牲山羊となったトロツキーをヒューマニストとしての立場からとり上げ、スターリンの暗黒面も廻上に乗せ、改めて社会主義の理解を促進したのであろう。この意味で、このトロツキー劇は記録演劇以上に党派性の濃厚なドラマとなり、トロツキー思想を追放した事に対する抗議の劇となっている。トロツキーを告発した人間を逆に告発するということである。トロツキーはこのドラマで生身の姿を現わした。そのトロツキーは歴史の中に消えたが、彼の生涯は歴史に対する信頼によって支えられていた。これもまた Weiss の信仰であろう。そしてこのドラマは、われわれに近代革命という歴史的段階における人間と社会のあり方の検討を迫ってくるようである。

参 考 文 献

ユダヤ人の歴史

レーニン伝への序章

Über Peter Weiss

シーセル・ロス，長谷川訳

ドイッチャー，山西訳

みすず書房

岩波書店

Suhrkamp